

アルバイトの話 その1 (みがきの仕事)

大学生の時には、本当にいろいろなアルバイトをしたものです。どのアルバイトも、今、振り返ってみますと、全て私にとってはいい経験であり、いい思い出となっています。今回は、「みがきの仕事」についてお話しします。詫間小学校の学校便り「琢磨 (たくま)」も、「みがく」という意味なのですよ。

喫茶店のカウンターでアルバイトをしていたある日。常連のお客様から「うちの工場でアルバイトしないか？」と誘われました。「でも、この店でもアルバイトしていますし…。」とやんわりとお断りしたのですが、「毎日じゃないんだ。どうしても手が足りない時に、2、3日でいいんだ。この店のマスターには話をつけてあるから。何とか頼むよ。仕事ができたら連絡するから、それじゃ、よろしく。」と、めっちゃ強引に、もう一つのアルバイトが決められてしまいました。

そのお客様は、金型工場の社長さんでした。溶けたプラスチックを金属の型に流し込むと、ある形のプラスチック製品が出来上がるのですが、その金属の型を「金型」と言います。そのお客様は、金型を作る工場の社長さんというわけです。皆さんのまわりにあるプラスチックでできている物のほとんどは、金型に流し込まれたプラスチックが固まってできたのです。

プラスチックの表面は、つるつるしている物とざらざらしている物があります。つるつるしているプラスチック製品を作る金型は、その鉄の面が、まるで鏡のように光っていなければいけません。私が、この社長さんに頼まれたアルバイトは、出来上がった金型の鉄のざらざらした面を、鏡のようにピカピカにみがき上げる仕事だったのです。

簡単な仕事のように思えました。実際、鉄をみがく小さな石のような棒を使って、ひたすらみがくだけの仕事なので、特別な技術は必要ありません。ただ、シュッシュと、みがくだけなのです。自分の顔が写れば完成ということですが、短いときで16時間、長ければ30時間ほど、手でみがき続けるという大変さがあります。しかも、納期ぎりぎりに金型が仕上がるので、納品まで、ほぼ徹夜でみがき続けるという短期集中のとても大変な仕事だったのです。

この作業は、機械は使えません。機械でみがけば楽なのですが、はしの方の角を丸めてしまう危険性があります。角を丸めてしまうと、溶けたプラスチックがはみ出して、バリができてしまいます。そうすると、この金型、実は、何百万円もしますが、最初から作り直さなければなりません。

少しだけ工場で働いている方に、みがき方を教えていただきました。気をつけるのは、角を丸めないことだけ。こつは、最初は、目のあらい石で、段々と目の細かい石にしていくことだけでした。実は、この社長さんがこの仕事を私に頼んだのには、わけがありました。私がスピードスケートの部員だと知っていたからでした。氷の上を滑るためのスケートぐつのブレード (刃) は、自分でみがくののですが、この作業と全く同じなのです。社長さんは、みがきの経験がある私に声をかけてくれたということなのです。

1時間や2時間なら何ともない作業も、1日に8時間以上やればさすがに嫌になります。みがいてもみがいても、自分の顔は写りません。手も抜けません。それは、納品する日が決まっているからです。時間との戦いでもありました。仕事の厳しさというのを、嫌と言うほど味わいました。

「みがく」という作業をしながら、私は「みがく」ということがどういうことなのかを考えていました。みがくというのは、物と物をこすり合わせて、どんな小さなでこぼこも無くすることなのです。それには時間がかかること、根気が必要なこと、途中で止めたなら何の意味もないこと、そして、楽しくない、いや、苦しいだけの作業なのだということが分かりました。

数ヶ月に数日のアルバイトでした。ある日、私は、私がみがいた金型 (自動車のドアミラー) のテストに連れて行ってもらいました。金型が大きな機械にセットされ、溶けたプラスチックが、私がみがいた金型に注入されている様子を見ることができました。その金型から出てきた製品を、社長さんは、まず私に手渡して「どうだ？」と聞きました。私がみがいた所は、つるつるのプラスチックになっていました。黒いそのドアミラーのプラスチックには、バリはありませんでしたし、私の顔も写っていました。社長さんは、私の答えは聞かずに「合格だな！これで800万円の仕事が完了だ！」と言いました。

このときに、私は「みがく」という作業の先にあるものが見えた気がしました。

アルバイトの話 その2 (バスの添乗員)

大学生の時には、本当にいろいろなアルバイトをしたものです。どのアルバイトも、今、振り返ってみますと、全て私にとってはいい経験であり、いい思い出となっています。今回は、「観光バスの添乗員」についてお話しします。

大学の掲示板には、「アルバイト募集」のコーナーがあります。ある日、その掲示板に「観光バスの添乗員募集」という紙がはってありました。その会社(富士急行バス)に電話してみますと、「バスガイドではないので、バスに乗って行くだけの簡単な仕事です。」と言われ、それだけでお金がいただけるのかと、さっそくそのアルバイトをすることにしました。

ところが、ただバスに乗って行くだけの仕事ではありませんでした。

例えば、朝7:00にバスが出発の場合は、前日の夜には、バス会社に入り、そこで一晩泊まらなければなりません。もしも、何かあって遅れてしまったらバスが出せないからだそうです。1日のアルバイトにしては、アルバイト代が高いと思っていましたが、前日の夜から拘束されるということだったので。そして、仕事の内容が書いてあるメモを渡されます。では、その日のお仕事を再現してみます。

朝6:00。運転手さんと2人並んで、会社の偉い人から気をつけることや運行計画を聞きます。もちろん健康チェックもします。6:15。バスの点検です。私はバスの外でいて、ライトやウインカーなどが正常かどうかを確かめます。掃除や窓ガラスふきもして、座席の点検もします。7:00に出発するまでに、かなり疲れてしまいます。お客様を迎えに行くまでは、座っていてもいいのですが、バスが着くと、バスの誘導、そしてお客様の出迎え、座席への誘導、お客様の荷物の積み込み等があります。そして、バが出発します。最初はお客様へのご挨拶です。「本日は、富士急行バスをご利用いただきまして、誠にありがとうございます。本日、運転手は〇〇、添乗させていただきます私は真鍋と申します。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、車内で気を付けていただきたいことを・・・。」となります。挨拶が終われば座って目的地まで行けばよいことになっているのですが、それが、実はそうではありません。大抵のお客様は、私にガイドをしろと言います。それはまず無理なのでお断りしますが、カラオケの曲をかけたり、お客様が用意した飲み物を配ったり、気分が悪くなった方を介抱したり、ビデオをかけたり、マイクを回したりと、結局は、目的地まで休む暇がありません。トイレ休憩のサービスエリア等では、お客様に買い物を頼まれたり、出発時刻になっても戻ってこないお客様を探したり、運転手さんに、窓ガラスの掃除を命じられたりと、「もう、かんべんしてください。」と言いたくなるほど仕事があるのです。

12:00。目的地に到着します。運転手さんは、休憩とお昼ご飯ですが、私は、バスの車内清掃、ガラスふきをしなければなりません。ゴミを片付けるだけでも大変です。しかし、お客様が観光している間は、少し休むことができます。その間に、トイレに行き、食事を済ませます。目的地での時間が長ければ長いほど、休む時間は長くなります。この日は、目的地で3時間滞在でした。15:00頃、帰路につきます。帰りのバスでも仕事は同じです。夜の21:00頃、バスが到着する少し前に、お礼のご挨拶「本日は、富士急行バスをご利用いただきまして誠にありがとうございました。・・・。」をし、お客様が全員バスを降りたら忘れ物が無いかの確認をし、バス会社まで戻ります。バス会社に着くのが22:00頃。これで終わりではありません。車内の清掃と、バスの洗車(大きな洗車機を通るが、細かいところは手で洗う)、点検をしなければなりません。23:00過ぎに、全ての仕事が終わります。

バスの添乗員のアルバイトは、何回かやりました。大変でしたが、楽しいこともありました。特に思い出に残っているのが、小学生の遠足の添乗です。一般のお客様と比べて学校の遠足はとても楽です。それは先生方がしっかりと子どもたちを見てくださり、指導して下さるからです。車内にゴミが落ちているということもまずありません。お客様が小学生の時だけ、運転手さんをお願いして少しだけガイドさんのまねごとをさせていただきました。教育実習みたいなものですね。子どもたちとのやりとりが、とても楽しかったです。そして、最後は、必ず「ガイドさんじゃなくて、添乗員のお兄さん。今日は、本当にありがとうございました。」とお礼まで言ってくれます。

「おい、お前、バスの添乗よりは学校の先生に向いてるな。卒業したら学校の先生になるのかい?」なんて、会社に戻る途中で、運転手さんに言われたこともありました。

言葉について

アルバイトシリーズは、ちょっと休憩（きゅうけい）して、今日は「言葉について」のお話をします。私は、国語科が専門ですので、やっと国語の先生らしい記事を出すことができます。

言葉って、とても「ふしぎ」なんですよ。

例 私のお父さんは、毎朝、朝ご飯を食べる前に、台所で新聞を開きます。

さて、お父さんは、何をしているのでしょうか。そうです。「新聞を読んでいる」のですね。国語辞典で「開く」を調べてみます。「開く」の意味は5つも書かれています。①しまっていたものや、ふさがっていたものがあく。広がる。「窓が開く。」②花が咲く。「桜が開く。」③始める。「店を開く。」④間があく。へだたりができる。「1位との差が開く」⑤新しく土地を耕す。「あれ地を開く。」の5つです。でも、「読む」という意味はありません。辞典にもものっていないのに、私たちは、「新聞を開く」の意味を、閉じていた新聞を広げるというのではなく、「新聞を読む」と理解することができるのです。「ふしぎ」だと思いませんか？

それは、国語の勉強を積み重ねてきたからなのです。物語や説明文を読んで、言葉や、言葉と言葉のつながりから、そして、自分の経験と結び付けながら、直接は書かれていないことを読み取っていく勉強をしてきたからこそ、こんなことが簡単にできるのです。

では、例の私のお父さんは、毎朝、朝ご飯を食べる前に、台所で新聞を開きます。を、新聞を読むのではなく、辞典の意味の①のように、ただ「あける」「広げる」という意味にしたい時には、新聞の前か後ろに漢字1文字を加えるといいのです。さて、その漢字1文字は何でしょうか？ご家族で考えてみてください。

私のお父さんは、毎朝、朝ご飯を食べる前に、台所で 新聞 を開きます。

実は、この問題は、私が小学校5、6年生のために考えて作った問題です。答えも用意していました。私が用意していた答えは、

私のお父さんは、毎朝、朝ご飯を食べる前に、台所で新聞を開きます。

でした。新聞を開くというのは、本を開くと同じように「読む」ということですが、それに「紙」がつけば、読むというのではなく「新聞紙」という物を開く意味になるだろうと考えたのです。

私が5年生を担当していた時に、この問題をクラスの子どもたちに出してみました。すると、衝撃的なことが起こったのです。子どもたちが考えた答えの中には、「新聞紙」というのもありましたが、クラス全員が満場一致で「これが一番！」という答えは、「古新聞」だったのです。完全に子どもたちに負けてしまいました。そして、とてもうれしくなりました。

私のお父さんは、毎朝、朝ご飯を食べる前に、台所で新聞を開きます。
(何かを包むのでしょうか。もしかしたらお弁当？そんなことまで想像できます。)

私たち教員は、子どもたちを教えていると思っていますが、実は、教えている何倍も、いや何十倍も、子どもたちから教えてもらっていることがあるのです。ありがたいことです。

スケート場でのアルバイト

また、アルバイトシリーズにもどります。皆さんは、アイススケートをしたことがありますか？氷の上を滑るスポーツなので、あまり経験がないかも知れませんね。そう言う私も、高校を卒業するまでは、一度もアイススケートをしたことはありませんでした。

ところが、山梨県の大学に行って、そこで「スピードスケート部」に入部してしまうのです。スケートの初心者の方が・・・私が行った大学は、山梨県の田舎にあるのに、北は北海道から南は沖縄まで、全国各地から学生が集まってくる大学です。部活動や同好会が盛んで、かなり多くの学生が何らかの部や同好会に入ります。私も、いろいろな部や同好会から誘われましたが、せっかく寒い町に来たのだから、ここでしかできないことをやってみようと「スピードスケート部」に入ったわけです。高校まで陸上をしていましたので、体力には自信がありましたし・・・。そして、大学からスケートを始めたというのは私だけではなく、その年に入部した9人の新入部員全員が、そうだったのです。

スピードスケート部の練習は大変厳しく、しかも上下関係（先ばいと後はいの関係）も、今思い出しても涙が出そうになるほど厳しかったのですが、そのことは、今回のアルバイトと直接は関係ないので、また今度ということにします。

このアルバイトは、普通のアルバイトではありません。私たちのスピードスケート部が、練習場として借りている遊園地のスケート場（営業時間前）があるのですが、土曜日はオールナイトで営業をしています。そのオールナイト営業の貸し靴のアルバイトを、私たちの部員が交代ですというものです。スケートリンクを安く貸していただく代わりに、私たちが、安いアルバイト料で働くということなのです。もちろん、深夜のアルバイト料ですから、定額は、結構高いのですが、その一部（いや大部分を）リンクの使用料として差し引かれるというアルバイトなのです。言葉は悪いですが、ほとんど「ただ働き」に近い仕事だったのです。

スケート場は屋外ですので、氷点下ですが、貸し靴コーナーは、ぬれた靴を乾かさなければいけませんので、かなり暖かいのです。その点は助かるのですが、眠気との戦いとなります。忙しい時は、何とかありますが、夜中の2時頃から朝の6時頃までは、かなりお客様も少なくなります。とにかく、眠くて、眠くて仕方なかったことを覚えています。一つだけの楽しみは、園内で使えるミルククーポン（夜食）を持って、休憩時間に好きな物を食べることだけでした。

朝の9時前に仕事は終わりです。事務所にアルバイト代をいただきに行き、それで仕事は終了です。アルバイトのついでに、営業中のスケートリンクで滑って帰ってもいいのですが、私は、一度も滑ったことはありませんでした。一刻も早く眠りたいとの一心で、往復の電車代に数百円が上乗せされた袋を持って、さっさと帰ったものでした。

そうそう、そのアルバイト代を渡してくれたのが、実は、橋本聖子さんでした。そうです。あの「東京五輪パラリンピック組織委員会」の橋本聖子会長さんです。橋本聖子さんは、私より一つ年下ですが、当時は、既に世界的なスピードスケート選手でした。橋本さんが所属していた会社というのが、その遊園地を経営している会社だったので、スター、有名人だった橋本さん（スケート選手だけでなく会社員としての仕事もしていた）から、アルバイト代をいただくといったことが起こったというわけです。服にサインを書いてもらっている仲間もいました。私は、握手をしていただいただけでしたが・・・。「真鍋さん。ごくろうさま。」（名前は袋に書いてあるので、決して橋本さんが覚えてくれていたというわけではない。）という一言だけで、徹夜の疲れが吹っ飛んでいったように思いました。

先日、記者会見で話している橋本会長を見ていて、当時のことを思い出しました。

観光ホテルでのアルバイト

私が大学生の時に住んでいた山梨県は、言わずと知れた観光地です。富士山、富士五湖、忍野をはじめ、石和温泉、昇仙峡など、有名な観光地がたくさんあります。

学生がアルバイトを探す方法は、今ならインターネットでしょうが、当時は大学の掲示板のアルバイト募集の貼り紙が主なものでした。しかし、それ以上に多かったのが、友達で紹介だったのです。

ある日、親友の片岡君が私の部屋にやってきて、こんなやり取りがありました。

「真鍋、次の土日、泊まりがけで観光ホテルのアルバイトに行ってくれないか。2日で1万円。交通費は別に支給される。俺も、一緒に行くんだけど、次の土日は人手が足りないんだ。」

「いいけど。どんなことするんだ？その観光ホテルのアルバイト、片岡は、ずっとやってんのか？」

「1年生の時に、上田先輩（スピードスケート部の3学年上の人）に紹介されて行ったんだ。それから忙しい時に助けてくれと、ホテルから連絡が来るんだ。次の土日は、団体客で満室なんだったって。

まあ、やる事は、食事の準備とか片付け、布団を敷くとか…。何とか頼めないか？」

というわけで、私は、親友の片岡君と一緒に、有名な観光地の大きなホテルでアルバイトをすることになったのです。当時は、1時間500円位がアルバイト代の相場だったので、2日（13時から翌日12時まで）で1万円もいただけるというアルバイトは、なかなかすごいアルバイトでした。

土曜日の午後1時前にホテルに着きました。着いた瞬間から、持っていた荷物は事務所に放り込んで仕事の開始です。まずは、100人を超える宴会場の掃除。そして、お膳のセット。従業員の方がするのを見て、同じように並べていきます。1時間くらいで終わりました。いきなりだったので、かなり疲れましたが、次の部屋に連れて行かれました。何と、ここは250人の宴会場。同じく、掃除をして、お膳を並べていきます。先ほどと、少し違った用意です。間違うと、従業員の方に怒鳴られます。ゆっくりはできません。遠くから、「お客様が到着したよ。」と叫ぶ声が聞こえてきました。

全ての準備が終わったのが、午後6時前でした。すぐさま、宴会が始まります。今度は、料理をどんどん運んで出していきます。従業員の方と2人一組で、何百人もの料理を延々と出し続けていくのです。その途中で、「おい、おにちゃん、ビール10本。」とか「次の料理を早く出して。ずっと待ってんのよ。」といったお客様の注文にも応じなければいけません。実は、お客様が宴会をしている間に、もう一つのチームは、部屋に布団を敷きに回っているのです。このホテルの従業員とアルバイトが何人いるのかは分かりませんが、とにかく誰一人、1分たりとも休んでいる人はいないのです。

夜の11時。10時間ぶっ続けで働いて、やっと、従業員の食堂で遅い夕食が出ました。この時、私は初めて着物姿の「若女将さん」に挨拶をされました。アルバイトの学生は、私と片岡君を含めて、10名ほどいましたが、若女将さんは、何と全員の名前を覚えていたのです。話す元気もなく、とにかく夕食をひたすら食べている私たち一人一人に、若女将さんは、声をかけてくださるのです。「あなたは、真鍋君ね。今日が初めてなのね。大変だったでしょう。たくさん食べてね。そうそう、真鍋君は、香川県出身なんだってね。私、一度、金比羅さんに行ったことがあるのよ。」と笑顔で。

後で、従業員の方に、「若女将は、本当に立派な人だ。いつも、こうやって、食事の時には、女将さんは、自分は食べずに、従業員一人一人に声をかけてくださる。時には、遅くまで悩み事を聞いてくださる。でも、次の日の朝は、5時半には、もう起きて、いや、着物姿で事務所にいるんだよ。」と教えていただきました。私は、ホテルの（10歳も年が変わらない）女将さんという仕事がどんなに大変なのか、そして、人の上に立つ人間はどうあるべきなのかを、この時に実感させられました。

私と片岡君は、朝食会場となる宴会場の端に布団を敷いて眠りました。翌朝は、5時半から朝食の準備が始まりました。翌日も朝食の準備と片付け、布団の片付け、部屋の掃除と休む暇もなく働き、お客様が発した後も仕事を続け、正午に長かったアルバイトを終えました。私たちは、これから休めます。でも若女将さんや従業員の方は、これからも昨日と同じ仕事が続くのです。

私が、このホテルのアルバイトをしたのはこの2日間だけでした。いつか、お客としてこのホテルに泊まると、帰り際に若女将さんに約束しましたが、その約束は40年近く経った今でも果たすことができていません。コロナが収まり、定年退職したら、ぜひ行ってみたいと思います。

授業参観（昭和40年代）の思い出

次の日曜日は、授業参観ですね。しかも、日曜日ということで「がんばって勉強をしているところを見てもらうぞ!」と、今から張り切っている皆さんも多いことでしょう。

私の両親は、二人とも働いていました。今から50年も前、ずいぶん昔のことですので、当時はなかなか仕事を休むことができなくて、授業参観はいつも祖母（うちの近所の瓦屋さん）が来てくれていました。友達は、授業が始まる前、みんな顔は教室の後ろを向いて、親の姿を見つけるとうれしそうに手を振っていました。私は、友達に「よしき君のおばあちゃん来たで!」と言われても、前を向いて座ったままでした。（かわいくない子どもだったと思います。）

小学校2年生か3年生の時に一度だけ、母親が授業参観に来てくれるということがありました。私はうれしくて、うれしくて、その日だけは授業が始まる前、体が完全に教室の後ろを向いて、母親が教室に入ってくるのをワクワクしながら待っていました。その時初めて、後ろを向いて親の姿を見つけることが、どんなに楽しいことなのかを知りました。

教室の後ろの入り口から入って来た母親を見つけた時、私はとてもうれしくなりました。となりの席の友達が「あっ、よしき君のお母さんや!今日は、来てくれたんやな。よかったなあ。」と話しかけてきました。私は、きっと満面の笑顔だったと思いますが、何の返事もしなかったと思います。それよりも、母親の前でしっかりと活躍している姿を見せなければと、気合いを入れ直していたと思います。

その日の授業は、50年経っても忘れもしない「音楽」でした。授業が始まって、親の方を向いて歌を歌うという時になって、私は大変なことに気が付きました。勉強で使う音楽の教科書はあるのですが、そのページだけが破れていてないのです。これまでに習った歌なら何とかごまかして歌うことができるのですが、今日、初めて習う歌だったのです。とにかく歌詞が分かりません。先生が、「1番の歌詞を読んでくれる人?」と言われても、私以外の全員は「はい!」と手を挙げているのに、私だけは、手を挙げるできません。おまけに「よしきさん。どうしたのかな?いつもは一番に手を挙げるのに。今日は、初めてお母さんが来てくれたので緊張しているのかな?」なんて、余計なフォローをしてくれるものですから、教室中に笑いが起こってますます手を挙げることができなくて、ましてや「教科書のこのページだけがありません。」と、親がいる前で言うこともできず、結局、その日の授業参観は、活躍どころか1回も発表すらすることなく、ずっともじもじして終わってしまったのです。

家に帰ってからも大変でした。夕食の時に「お父さん、今日は、本当になさげなかったわ。せっかく都合つけて授業参観に行ったのに、よしきは、もじもじして、1回も手を挙げんし、歌やって、他の子は一生懸命大きな口を開けて歌ってるのに、この子ときたら、口も開けないで歌っているんか歌ってないんかも分からん状態で。本当になさげなかったわ。」と母親。「まあ、よしきは、いざという時には、ダメなんよ。」と姉。「今度は、もっとがんばらないといかんぞ。」と父。

本当なら、その日の夕食は、全くその逆の状態を想定していたのです。「お父さん、今日は、本当に参観に行ってよかったわ。よしきは、一番に手を挙げて、大きな声で歌詞を音読したんですよ。お母さん、本当に感心したわ。」と母。「そうなんよ。この子は、いざという時には力を出す子なんよ。」と姉。「そうか、それはすごかったなあ。お父さんも、ぜひ見てみたかった。」と父。それを聞きながら、満面の笑みで夕食を食べる私。・・・だったはずなのですが。

その夜、私は、勉強机の上の積み重ねられたプリントの山の中から、音楽の教科書のそのページを見つけました。

そして、母が小学校の授業参観に来たのは、その日が最初で最後でした。

私の田植え体験

昭和40年代。その頃、私は小学生でした。今では考えられないことですが、当時は「農繁休業」というのがありました。簡単に言えば、米作りの作業が大変忙しくなる田植えの時期と稲刈りの時期に、学校が休みになるというものです。

担任の先生から「来週の月曜日と火曜日は、農繁休業です。この辺りは、今週の土曜日から来週の火曜日頃までに田植えをするということです。農家の子どもたちは、しっかり田植えのお手伝いをしなさい。農家でない子どもたちは、学校があります。いつものように登校しなさい。ただし、親戚や近所の田植えを手伝うという人は、学校に来なくてかまいません。しっかりお手伝いをしなさい。」というようなことを言われます。この頃は、土曜日の午前中は授業がありましたので、土曜日は、学校から帰ってすぐに田んぼに向かうという子どもたちも多かったのです。

さて、今とは違ってかなり大らかな時代です。誰が農繁休業で休むとか、誰が学校に来るとかを事前に細かく調査するということはなく、来ていない子は、病気などの欠席の理由がなければ「農繁休業」みたいな感じでした。例えば、「〇〇君は、農家じゃないけど、どこかの田植えの手伝いをすると言うとったか？」と先生に聞かれ、「〇〇君は、□□さんの田植えを手伝うと言うとったで。」と子どもが答え、「そうか、ほんなら〇〇君は、農繁休業。」みたいな感じで農繁休業が決定する場合もありました。また、農繁休業が終わって登校した時に「△△さん。どこかの田植えの手伝いをしたか？」と先生に聞かれ、「はい、おばあちゃんちの田んぼです。」と答えると「はい、農繁休業ね。」となる場合もありました。

私の家は農家ではなかったのですが、田植えの手伝いをするという理由をつけて何とか休みたかった私は、米作りもしている瓦屋の祖父に言いました。「来週の月曜日は、田植えやろ？手伝おうか？」と。すると、「いや、人手は足りとるからええわ。長男が田植えのために帰ってくるし、瓦屋の職人さんも手伝ってくれるからの。」と。何としても学校を休みたい私は、「いやあ、それでも人手は多い方がええから手伝うわ。」と私。「そうか、ほんだらお願いしようかの。」と祖父。こんな風にして、私は祖父の田植えの手伝いを少しだけして、農繁休業で学校を休んだのです。祖父は兼業農家（瓦屋と米作り）だったので田はあまり広くなく、田植えは1日で終わります。しかし、学校は2日間休むことができるのです。嘘について休むのは心が痛い（本当はばれたら叱られるから）ので1日は、しっかり田植えの手伝いをしたものです。

当時、田植えの機械はありませんでした。20人くらいが横一列に並んで張ったひもの所に10本くらいずつ植えては下がり、植えては下がりを繰り返していきます。稲の苗は、無くなりそうになると、祖父が足下に向かって向こうから投げられます。祖父は、指揮者もしながら、苗の調達係もしていました。その苗の束が、バシャーンと足下近くに落ちた時に、頭から泥水がかかることもありました。

田植えは、腰が痛くなりますが、それは我慢できます。どうしても我慢できないのが、田んぼの中でヘビが泳いでいることがあり、そのヘビが足の近くに来ることだったのです。ですから、私は、田植えをする時は「タクマさん」という屈強な瓦職人さんの隣で植えるようにしていました。「タクマさん」は、ヘビが泳いで来ると、さっと手でヘビの首の所をつかんで、20mくらい離れた道路の向こうにヘビを投げます。空中で紐のように踊りながら飛んでいくヘビを見て、タクマさんを尊敬したものでした。

この農繁休業も田植え機の普及によってだんだん無くなりました。私が小学校の高学年になった頃にはもう完全に無くなっていったと思います。まだ人手を貸し合っていた頃のかすかな思い出が、あぜ道で、みんなでお昼ご飯を食べたことが、この前、5年生が昔ながらの田植えをしている姿をみたことで急によみがえってきたのです。

夏休みの思い出

もうすぐ夏休みですね。今年は、7月21日から8月31日まで、例年どおりの夏休みとなります。まだまだ、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、行動が大きく制限された状態が続いていますが、長い夏休みを楽しく充実したお休みにしてほしいと願っています。

さて、昭和40年代。その頃、私は小学生でした。もちろん、今の子どもたちと同じで夏休みはとても楽しみでした。夏休みと言えば、どこかに旅行に出かけるといったイメージがあるかも知れませんが、私が子どもの頃、旅行するという事は、まずめったにありませんでした。家に自家用車がある家さえ珍しい時代でしたから…。お出かけしても近くの夏祭りか海水浴くらいでした。ついでに言えば、外食なんて、とても贅沢なことで、年に1回あるかないかという時代でした。

ところが、小学校1年生の時の夏休みだけは特別でした。1970年。大阪で万国博覧会があり、そこに家族4人で行くことになったのです。もちろん、家族旅行なんていうのは、贅沢なことで、うちの家では、万国博覧会のことは話題にさえなりませんでした。ところが、農協だったか銀行だったか、何かの景品みたいなのが奇跡的に当たって、うちの家族4人が大阪の万国博覧会に招待されたのです。もちろん、団体旅行です。そして、新幹線はまだ開通していない時代です。大阪まで何時間かかったのでしょうか。覚えていませんが、特急列車に乗って何時間もかかって、生まれて初めて香川県から出た大旅行だったのです。しかも、目的地は、あの万国博覧会。世界中からたくさんのお客様が来る大イベントだったのです。

小学校1年生だった私は、数日前から、「万博、あと何日？あと何日？」と母親に何回も聞いていたそうです。8月だったと思いますが、万博に出発する日の朝、目が覚めたときに父親が、「今日は、とうとう万博の日やで！」と言ってくれたのを今でも覚えています。

ところが、万博のことは、ちっとも覚えていないのです。とにかく長い間並んで、何かを見たという記憶しかなくて、本当に何も覚えていないのです。ただ、暑くて疲れたこと、そして、万博で買った「かき氷」が100円だったこと、それを母親が「このかき氷、100円もするんで！」と言ったのに対して、父親が、「せっかく万博に来たんやから、ええやないか。」と言っていたことくらいしか覚えていないのです。万国博覧会は、多分、小学校1年生の私には高度過ぎて、楽しくなかったのだと思います。ちなみに、この当時の100円は、今の100円とは大きく違います。1970年頃の物の値段を掲載しますので、当時100円のかき氷の値段をどう感じたかを想像してみてください。大学卒の初任給…約3万円、ラーメン1杯…約100円。ちなみに、現在と比較してみましょう。(私が平均的だと思う金額にしています。) 大学卒の初任給…約23万円、ラーメン1杯…約700円。給料やラーメンの値段は、今の7～8分の1といったところなので、単純に考えると、カップに入ったかき氷は、700円～800円といったところでしょうか。物によっては、このような割合にはなっていないので(例えば映画館は、今の2分の1の料金)、単純には言えませんが、感覚的には「かき氷、1個1000円」といった感じだったと思います。

小学校の6年間で、県外への家族旅行をしたのは、これが最初で最後だったと思いますが、見たはずの「太陽の塔」も「月の石」も全く覚えていないのです。

それよりも、夏休みと言えば、扇風機の前で、「アー」と声を出してみたり、井戸水で冷やしたスイカにかぶりついて種の飛ばしっこをしたり、蚊帳の中で「テントみたい」と遊んでみたり、友達と朝から晩まで真っ黒に日焼けするまで外で遊んだり(本当は、午前中は家で宿題や読書をしなさいと先生に言われていたが)、カブトムシに糸を付けて、5円玉を何個引っ張れるか競争したり、庭で線香花火をしたり、渦巻き型の蚊取り線香が燃え尽きる瞬間を見たときと喜んだり、飼い犬のジョンに水をかけてやったり、飼い猫のミーコの後をついて行って涼しい場所を見つけたり、先生に暑中見舞いを書こうとして、なかなか書けなくて、とうとう8月の終わりになってしまったり…。そんなことばかり覚えているのです。きっと、その何気ない日常、夏休みの平凡な日々が、今となっては最も大切な思い出になっているのでしょうね。いい夏休みを過ごしてくださいね。